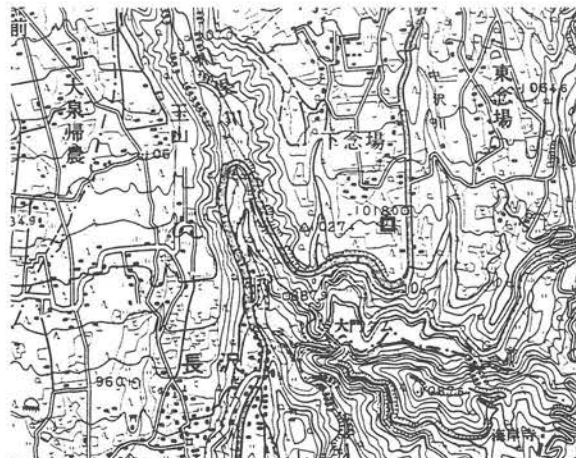


7. 伝仁王屋敷遺跡

所在地 高根町清里字念場原3461
調査原因 民間事業
調査期間 昭和63年12月1日～12月30日
調査面積 14m²
調査主体 高根町教育委員会
担当者 雨宮正樹



当遺跡は、八ヶ岳南麓の標高約1,020mを測る高原に位置し、南北に延びる尾根状の台地の南に面する傾斜地に立地する。東西約50m離れたところを現在の国道141号線（佐久甲州街道）が南北に縦貫している。

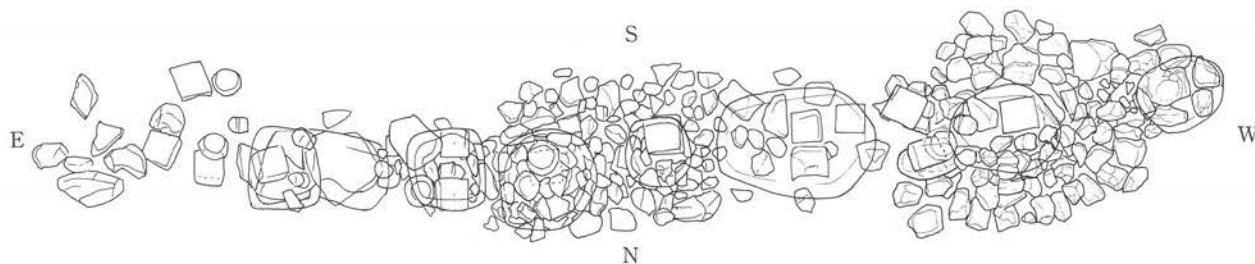
この道は、長沢の宿を通りぬけ、川俣川に架かる月の木橋を渡り弘法坂を登り上がるルートになっているが、旧道は現在の清里湖（大門ダムによる人造湖）の北側の縁をめぐり、風の丘公園付近で現道と交わり、当遺跡の東か西の直近をとおり、平沢を経由して佐久・小諸方面へ向かっていたと思われる。この付近は、念場原といわれ、『甲斐国志』によると中世に清次という人物が開発を行ったが気象条件の悪化によってこの地域を放棄したと記している。

この遺跡が発見された経緯は、地元の酪農家による山林の開墾事業が計画され、これに伴い清里郷土研究会が、この山林一帯は、『甲斐国志』の海岸寺の項によると「昔は八ヶ岳の麓念場原にあり」と記述され、地元の伝承でもこの地が海岸寺の旧地と伝えていることから、昭和63年5月に分布調査を行い、発見されたものである。

このことにより、当教育委員会では国および県からの補助をえて、昭和63年12月に遺跡詳細分布調査として調査を行い、南北朝期から15世紀前半に位置付けられる五輪塔が確認された。検出された五輪塔群は、東西7m、南北2mの範囲内に、拳大から人頭大の川原石によって一辺0.5mから1.5mの方形の基壇が7基あり、基壇の上に並んで建てられていたものが経年変化により倒壊し、現状で復元可能な五輪塔が2基、各部材として散乱しているが組み合わせできる五輪塔が10基分検出された。

なお、検出された基壇下部の調査を行ったが、小ピットのみの確認だけで、時代を特定できる遺物は出土していない。

発見された五輪塔群が、海岸寺に伴うものかの正否は明らかではないが、この発見によって15世紀前半には庵かお寺があったことが伺うことができる貴重な資料である。



伝仁王屋敷遺跡五輪塔群出土状況図